

Contents

\*\*\*\*\*

特集：2012 年選挙と米共和党の苦悩	1p
< 今月の”Washington Post 紙から >	
”Romney and Gingrich” 「下には下、共和党候補者選び」	7p
< From the Editor > 真珠湾攻撃 70 周年	8p

\*\*\*\*\*

特集：2012 年選挙と米共和党の苦悩

気がつけば今年もあとわずか 2 週間。来年の年明け早々の 1 月 3 日には、アイオワ州党員集会が行われます。2012 年米大統領選挙の予備選挙プロセスが、間もなく正式にスタートするわけですから、本誌としても本気で取り上げねばなりません。

2012 年選挙は、オバマ大統領への信任投票という性格を濃厚に帯びることになります。しかし「オバマ論」はほとんど出尽くして、むしろ「共和党論」の方が面白いのではないかと思います。共和党はブッシュ時代という「負の遺産」を背負っていたものの、ティーパーティーという「勝手応援団」の出現により、唐突に活力と方向性を得ることができました。しかるにその結果、2012 年選挙では「勝てる候補」を選びかねています。

今回は「悩める共和党」に焦点を当ててみました。

ホワイトハウス vs. 議会

今、ホワイトハウスのホームページ<sup>1</sup>を見ると、面白いものを見ることができる。一番上の部分に「あと 日××時間 分 秒」というカウンターがあって、刻一刻と数字が減っているのである。で、カウンターの下にはこんな風を書いてある。

"IF CONGRESS DOESN'T ACT, MIDDLE CLASS TAXES INCREASES IN:"

(もしも議会が行動しなければ、中間層は増税になります)

<sup>1</sup> <http://www.whitehouse.gov/>

これはオバマ政権が打ち出した景気刺激策である "Payroll tax" (給与税) の軽減措置が年末で切れてしまうので、「早いとこ議会は延長を決めろ」とホワイトハウスが脅しをかけている構図である。日本で言えば、官邸が国会に喧嘩を売っているようなもので、ワシントン政治の党派的対立はここまで来たが、とウンザリさせられるものがある。

給与税はもっぱら社会保障費に使われる。雇用者も同額を支出することになっていて、給与から天引きされることもあり、日本ならばちょうど社会保険料に相当する。年明けから上がりますよ、と言われれば誰もが慌てるだろうが、この軽減措置の延長に対しては、「**財政赤字を増やす**」、「**恩恵を受けられない国民が居るから不公平**」、「**公的年金制度が揺らぐ**」などの反対意見もある。高齢化時代には、どこでもありがちな議論なのである。

ただし経済効果という面では、給与税減税が延長されるとされないのでは、来年の米国経済の前提条件が天と地ほどに違ってくる。なにしろ平均世帯において、2012年の税負担が1000~1500ドル増えると言われている。個人消費を直撃することになるだろうから、これが延長できないようでは来年の米国経済はかなり危ういものになる。たぶん GDP 成長率で言えば、優に上下1%は違ってくるはずである。

そこで問題は議会、というよりは共和党の出方ということになる。米国経済を悪化させちゃいけない、という程度はもちろん承知しているけれども、自分たちのメンツもあるからおいそれとは乗ってこない。なにしろ去る11月23日には、超党派委員会(スーパーコミッティー)の歳出削減交渉が決裂した直後でもある。

さらに言えば、2012年には選挙があるわけだから、「来年は景気が良くない方が、野党としては選挙が有利になる」という「未必の故意」みたいな発想もないとはいえないだろう。これでは妥協しようというインセンティブは働きにくい。

だからと言って、オバマ大統領が「皆さん、悪いのは議会、それも共和党ですよ！」と声高に訴えている図式も、あまり褒められたものではない。ホワイトハウスが必死になればなるほど、議会共和党としては妥協が難しくなるのである。

もちろん、筆者としてもあと2週間で、何とか与野党の合意が成立するものと考えている。ただし問題は、給与税の削減を延長する場合の財源で1850億ドルと見込まれている。これを超富裕層からの増税で賄う(民主党)か、連邦政府職員の削減や給与凍結を当て込む(共和党)か、がいつも通りの争点になっている。

ということで、残された時間は短い。オバマ大統領は恒例のハワイでのクリスマス休暇への出発を遅らせて、法案の年内成立を待つ構えである。ちょうど本誌7月29日号「債務上限問題に思うこと」でも触れたとおり、政治の世界においては「締め切りは破られるために存在する」の法則がまたしても実現しそうな雲行きである。

大西洋の向こう側では、欧州債務危機が吹き荒れている。南欧諸国の中には、年内にも資金繰りに行き詰る国が出てくるかもしれない。欧州の金融機関勢も、もちろん綱渡りを続けている。ところがこんな年の瀬に、ワシントンではまたしても政争が行われている。まことにとって、呆れ果てるよりほかにはない。

## 議会選挙は共和党が優勢

こんな風に共和党側が強気に出してしまうのは、それなりの理由がある。2012年の大統領選挙は、いつも通り蓋を開けてみるまで分からない世界なのだが、議会選挙はかなりの確率で共和党側が有利なのである。それはごく簡単な算数の問題による。

### 議会の現有勢力

上院(定数100): 民主党51、共和党47、無所属2

\* 任期6年。2年ごとに3分の1ずつ改選

下院(定数435): 共和党242、民主党192、欠員1

\* 任期2年。2年ごとに全数改選

まず下院は2010年選挙に圧勝したお蔭で、共和党が大きくリードしている。そして2010年には10年に1度の国勢調査が行われたので、2012年選挙では議席の再配分が行われる。この際の区割り変更は、当然のことながら現職に有利に行われる。いわゆる「ゲリマンダー」というやつだ。

ゆえに2012年選挙は、戦う前から共和党が有利になっている。そして現在の議席数差は50もあり、現職優位と言われる議会選挙において民主党が多数を奪還することは、至難の業と言っていいだろう。

さらに上院はどうかといえば、無所属2人が事実上の民主党側なので、53対47の6議席差となっている。2012年には33議席分の選挙が行われる予定だが、この改選分の議席がなんと民主党23人、共和党10人という大差になっている。当然、議席の伸び代があるのは共和党側ということになる。2012年選挙は、ブッシュ政権末期の2006年に民主党が大勝した時の「次」の回に当たるので、最初から民主党は不利なのである。

選挙予測の定番、クックポリティカルレポートの12月1日分予測を見ると、民主党23議席のうちSolid 8 + Likely 5 + Lean 2 = 15議席はなんとか維持できそうだが、残る8議席はToss up(形勢不明)とされている。逆に共和党10議席は、Solid 4 + Likely 4 = 8議席がほぼ安泰で、残る2議席がToss upである。

ゆえに激戦が予想される10選挙区を、文字通り「トス投げ」して確率半々の5議席ずつと計算すると、それだけで2012年選挙は民主党20議席、共和党13議席となる。つまりは共和党側が3議席増で、新議会の勢力図は50対50の与野党伯仲ということになる。

さらに細かい話をすると、民主党のToss up 8議席中、実に6人の現職議員が引退を宣言している。アカカ(ハワイ)、ピンガマン(ニューメキシコ)、コンラッド(ノースダコタ)、ウェッブ(ヴァージニア)、コール(ウィスコンシン)といった有名議員が名を連ねていて、いかにも「時に利あらず」なのである。

こういった議会選挙情勢を勘案すると、共和党が「簡単に妥協する必要はない」と強気に出てくる背景が見えてくる。歳出削減交渉にしても、「どうせ来年の選挙で勝てば、こんなものは簡単に破棄できる」と高をくくってしまうのだ。なにしろ上下両院においてこれだけ共和党が優位に立つのは、第2次世界大戦後でも滅多にないことなのである。

### 予備選挙の役割 = 発掘と育成

それでは大統領選挙の行方はどうか。

ワシントンのコンサルタントであるポール・室山氏によれば、「オバマの再選確率は55%程度」とのことである<sup>2</sup>。これは納得感のある数字で、察するに「五分五分と言ったら現職大統領に対して失礼。でも六分四分と言えほどの客観情勢ではない」ということだろう。大統領選挙に関する2つの常識が、相反する答えを示しているからである。

ひとつは「2012年選挙はオバマに対する信任投票」であるから、現在のような8%台の失業率で大統領が再選されることはあり得ない、というものである。過去のデータを見る限り、経済状況がこれだけ悪いときに大統領が再選された例はあまりない。そして米国経済があと1年で急速に良くなるとは、正直なところ考えにくいのである。

そしてもう一つは、「つまるどころ、選挙はタマ（候補者）次第」という常識で、どんな客観情勢であろうとも、有権者は最後には候補者を見比べて判断する。オバマは既に大統領として3年を過ごしている。支持率は決して高い方ではないが、新人候補者が現職大統領をしのぐ迫力、説得力を持つことは容易ではない。ましてオバマは、前回（7.8億ドル）を上回る史上最高の選挙資金を確保する見込みである<sup>3</sup>。

正直なところ、米大統領選が「現職対新人」で争われる年は、いつも似たようなことになる。現職の側にはあまり変数はない。問題は「新人」の側が、短期間にどれだけ成長するかに懸っている。そのために予備選挙というシステムがあって、候補者の発掘と育成という役割を担っているわけである。

どちらかと言えば、民主党は候補者の発掘に力を入れる。だから候補者が大勢登場するし、明日をも知れない戦いを繰り広げる。党大会の当日まで候補者が決まらなかった、などということもある。意外な人物が勝ち残る、というのも昔からのお家芸である。

共和党は、むしろ育成の方に重点を置いている。彼らは昔から、候補者選びにさほど迷わない。党内で早めに「プリンス」を決めておき、本番ではこれに「かませ犬」的な候補をぶつけて、あまり迷うことなく本命を選ぶということを繰り返してきた。党内で大喧嘩をして、本選に影響が出るような真似はしない、というのが Grand Old Party（共和党の別名）の伝統なのである。

<sup>2</sup> 12月1日、エグゼクティブフォーラムでの講演から。

<sup>3</sup> 現時点の選挙献金総額は、オバマが8947万ドルであり、共和党側ではロムニーが3221万ドル、ペリーが1716万ドルと大差がついている。ギングリッチに至っては289万ドルに過ぎない。

## 共和党予備選挙の歴史

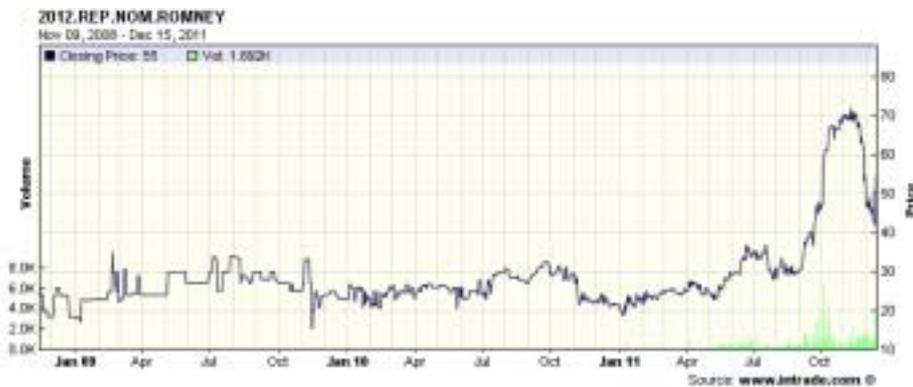
	<本命> ( )内は選挙結果	<対抗馬>
1976年	フォード大統領 (×)	<u>レーガン</u>
1980年	レーガン元知事 ( )	ブッシュ Sr. アンダーソン
1984年	レーガン大統領 ( )	なし
1988年	ブッシュ Sr. 副大統領 ( )	<u>ドール</u> 、ロバートソン
1992年	ブッシュ Sr. 大統領 (×)	ブキャナン
1996年	ドール上院議員 (×)	ブキャナン、フォーブス
2000年	ブッシュ Jr. 知事 ( )	<u>マッケイン</u>
2004年	ブッシュ Jr. 大統領 ( )	なし
2008年	マッケイン上院議員 (×)	ロムニー、ハッカビー
2012年	???	

しかも共和党の本命候補は、前の予備選で2位につけていた人間が自動的に昇格することが多い。上の表にある通り、1976年以降でこの法則に当てはまらなかったのは2000年のブッシュ Jr. だけである。これもおそらく、「1992年の父の無念を晴らす」という暗黙の了解が党内にあったのであろう。良くも悪くも、過去を引きずって物事を決めるのが共和党の古式ゆかしい伝統なのである。

## 伝統重視の党の伝統が崩壊？

この法則から行けば、2012年は前回2008年予備選で2位につけたロムニー前知事が来るのがごく自然な選択となる。ところが、そうなることを拒否するかのように、共和党予備選は迷走を続けている。

以下は、本誌がいつも参考指標にしている intrade.com の「共和党がロムニーを候補に選ぶ確率」グラフだが、勝利はほぼ確実と見た後に人気が急落している。ギングリッチ旋風によるものだが、これはいかにも珍しいパターンである。



これまでの共和党予備選の推移を振り返ると、下記のようにまとめることができる。

1. 最初にバックマン下院議員が脚光を浴びる。しかしすぐに失速する。
2. ペリー知事(テキサス州)に期待が集まるが、討論会での不手際が相次いで人気急落。
3. クリスティー知事(ニュージャージー州)の出馬が噂されるが、本人は不出馬表明。
4. 経営者のケイン候補が大旋風を巻き起こすが、セクハラ疑惑などで撤退。
5. 突如としてギングリッチ元下院議長が復活して急浮上。

まるで民主党の予備選を思わせる日替わりメニューであり、共和党らしからぬ「筋書きなき選挙戦」である。普通であれば、予備選プロセスにはお金がかかるので、人気落ちた候補者はどんどん退場していくものなのだが、今回は「討論会重視」の選挙戦となっていて、ロムニーとしては資金力の優位さを活かさない、という不運も重なっている。

こんな風になってしまったのは、**共和党がティーパーティー(TP)という異分子を取り込んでしまったために、体質が変わってしまったから**であろう。もちろん、TPが存在しなければ、今頃の共和党はまだ「ブッシュ時代の負の遺産」から抜け出せなかったことだろう。共和党はTPのお蔭でアイデアとエネルギーを得たし、2010年中間選挙の勝利もTPの力によるところが大きい。あまり文句を言えた筋合いではない。

ところで以下の通り、今年の大統領選日程は2008年に比べて余裕がある。3月末までは「勝者総取りルール」ではなく、「比例配分」で選挙人を分ける新ルールも加わった。意図するところは、「じっくり時間をかけて候補者を選ぼう」ということである。

### 今後の大統領選日程

<2012年>

- 1月3日：アイオワ州党員集会
- 1月10日：ニューハンプシャー州予備選
- 1月21日：サウスカロライナ州予備選
- 1月31日：フロリダ州党員集会
- 3月6日：スーパーチューズデー(テキサス、ジョージア、テネシーなど10州)
- 4月24日：ニューヨーク州、ペンシルバニア州予備選
- 6月5日：カリフォルニア州、ニュージャージー州予備選
- 6月12日：オハイオ州予備選
- 7月27日～8月12日：ロンドン五輪
- 8月27日～30日、共和党大会(フロリダ州タンパ)
- 9月3日～6日、民主党大会(ノースカロライナ州シャーロット)
- 11月6日：米大統領選&上下院選挙投票

<2013年>

- 1月20日：大統領就任式

こうしてみると、共和党の候補者選びは意外と手間取って、4月のニューヨーク州とか、6月のカリフォルニア州当たりまで長引くかもしれない。まるで2008年のオバマ対クリントンの死闘のようだが、**今回の予備選の行方は、共和党の体質がどれだけ変化したかを見る格好の指標**といえるかもしれない。

< 先週の”The New York Times”紙から >

”Romney and Gingrich, from bad to worse”

George F. Will

「下には下、共和党候補者選び」

December 3<sup>rd</sup> 2011

\*今回はワシントンポストのコラムから、保守派の重鎮であるジョージ・ウィルの論説をご紹介します。「保守主義」とはどういうものなのか、いろいろ考えさせられます。

< 要約 >

1980年以來、共和党はもっとも保守的になっている。大統領職を争うようになった156年の歴史の中でもっとも思想的に一枚岩になっている。お手軽保守のロムニーか、もっと右の確信派かという選択だが、もっとも保守的でないギングリッチを選びそうだ。

今の政治に対するロムニーの批判を聞く限り、彼の統治は覚束ないように見える。神は十戒、ウィルソン大統領は14か条だが、ロムニーの経済政策は59項目もある。減税と自由貿易と規制緩和の3か条で足りるのに。まあ、今のリベラリズムよりはマシだろうが。

しかるにギングリッチは今のワシントンの悪さを体現したようであり、俺は何でも知っている式の反保守主義的な信念に満ちている。自分の変容ぶりを仰々しく称える様は滑稽なほどで、最近選挙戦の再生をウォルマートやマクドナルドの創業になぞらえていた。エタノール補助金などの政府の愚行に取り入るのは俗悪の極みだし、フレディマックから160万ドルの献金を受けておきながら、他人の癒着を批判する厚かましさは金メダル級だ。

知的傲慢さを伴う過激な気性の持ち主である。1994年中間選挙では、わが子を殺した精神障害の母を引合いに出し、「こんなに世の中が病んでいるから、共和党に投票を」と説いた。彼のご都合主義は、最近の「反植民地主義のケニア人」というオバマ批判でも健在だ。

保守主義とは本来、社会の複雑さを理解し、軌道を修正して、秩序を改善する謙虚さのことである。ギングリッチ式の傲慢な気紛れさは、本来、敬して遠ざけるべきものである。

1948年のトルーマン大統領のように、オバマは議会と対決している。共和党はトム・デューイのような人物を送り出すべきではない。トルーマンはどうせ再選されないだろうと、共和党は冷たいNY州知事を候補者に選んだ。経験もあったし、堅実でもあったのだが、有権者は彼を嫌った。ロムニーを立てる前に、保守主義者は他の2候補を再考すべきだ。

リック・ペリーは討論会で余りに情けない。大統領の職務とは関係ないのだが、重要な要素ではある。テキサス州での業績と南西部の反中央感情という政治的資産は残っている。

ジョン・ハンツマンは、なぜか共和党嫌いの共和党員向け候補だが、その説くところは保守的である。支出削減と福祉改革を支持している。ファニーメイ、フレディマックも民営化するという。キャピタルゲインの二重課税も廃止。農業補助金も反対だ。「落ちこぼれ防止」の小中学校半国有化策は、「災害」と断じている。またロン・ポールの孤立主義と、敵意剥き出しの他の6候補の狭間で、ハンツマンの保守的な外交政策はまっとうである。

ロムニーはデューイではないだろう。ギングリッチは、「陶器を抱えた牡牛」ではなくなるかもしれない。ただし今、選ぶにはどちらもリスクが高過ぎる。

## < From the Editor > 真珠湾攻撃 70 周年

よく知られている通り、真珠湾攻撃は日本では 12 月 8 日ですが、アメリカでは 12 月 7 日です。連合艦隊は、日付変更線を越えてハワイを攻撃したからです。ゆえにオバマ大統領の声明文は、既に 12 月 6 日には公表済みでした。こんな書き出しです。

On a serene Sunday morning 70 years ago, the skies above Pearl Harbor were darkened by the bombs of Japanese forces in a surprise attack that tested the resilience of our Armed Forces and the will of our Nation. As explosions sounded and battleships burned, brave service members fought back fiercely with everything they could find. Unbeknownst to these selfless individuals, the sacrifices endured on that infamous day would galvanize America and come to symbolize the mettle of a generation.

今年の声明文は、「わが国は試練に遭っても団結する」式のお説教モードが入っており、暗に「今も大変なんだから、共和党はちゃんと協力しろよ」というメッセージが込められているようです。が、とにかく、「ある穏やかな日曜の朝、真珠湾の空に突如として日本軍の爆撃機が現れ…」というのが、アメリカ側で伝えられている物語です。

これに対し、日本側に伝わる記憶は以下の証言が典型的です。

半藤 東京の向島にあった国民学校の 5 年生でした。12 月 8 日は月曜日で学校へ行かなきゃいけないので、7 時ごろには起きていました。薄氷が張るぐらいの本当に寒い朝でしたね。午前 7 時にラジオの臨時ニュースが流れ、「帝国陸海軍は本 8 日未明、西太平洋においてアメリカ、イギリス軍と戦闘状態に入れり」と。普段通りにラジオ体操も放送されましたが、臨時ニュースは何べんも繰り返されました。学校に行くと先生たちが興奮していましたね。1 時間目に 1 年生から 6 年生まで校庭に集められ、校長の訓示がありました。「大変な時代になる。しっかり勉強せい」という、下町の悪がきには迷惑千万な話でしたが、学校中が緊張していたことを明瞭に覚えています。

(毎日新聞 12 月 6 日付「ニュース争論 真珠湾攻撃 70 年 半藤一利氏 / 松尾文夫氏」)

つまり米国では日曜日だったけど、日本では月曜日だった。だから当時の小学生は、「学校で開戦を聞かされた」というのが定番の物語となる。こんな風なズレが、いつでも日米関係にはつきまとう。そして誰かが「通訳」してくれないと、この段差でしばしば人はけつまずいてしまうのです。分かっただけで、な—んだ」ということが多いのですが。

\* 次号は 2011 年 12 月 28 日 (水) にお届けします。

編集者 敬白

本レポートの内容は担当者個人の見解に基づいており、双日株式会社および株式会社双日総合研究所の見解を示すものではありません。ご要望、問い合わせ等は下記にてお願いします。

〒107-8655 東京都港区赤坂6-1-20 <http://www.sojitz-soken.com/>

双日総合研究所 吉崎達彦 TEL: (03)5520-2195 FAX: (03)5520-4945

E-MAIL: [yoshizaki.tatsuhiko@sea.sojitz.com](mailto:yoshizaki.tatsuhiko@sea.sojitz.com)